

事が出来なかつたのであるか、シヤンカラはこの疑難に答へ、徳不徳なくんば如何なる當體も來生すること能はざると同時に、當體なくんば徳不徳の所依も亦その存する所なし、畢竟是の如き論議は論者をして思惟の二律背反に誘致せしむるに過ぎずとして居る、彼れの學説上亦止むを得ない結果であらう。これに依て我々は現象界を實有と見る場合に於て、その開關に關する議論は、究竟論理上の See-Stay 戯に陥らざるを得ないといふのが彼れの主張である事を知るのである、實際彼れに依れば、所謂實有の世界は無始の切初から存し、その切初の如何は遂に我々人間言語思惟の域外にありとなすのである。

尙、彼れの所謂根本無智論、時間空間に關する論議、その他眞智論に關聯して紹介すべき事項多々あるも、こゝに之等を割愛する。(Cf. Frazer, Indian thought past and Present, 1915.)

## 彙報

### 京都哲學會秋季大會

十月十四日(土)、午後一時より法科大學大講堂に於て開催。松本教授の開會の辭に次いで左の如き講演があつた。

○社會學的認識論 京都法文科大學講師 米田庄太郎氏  
○探究の態度と安立の態度

東京文科大學教授文學博士 姉崎正治氏  
右講演終了後引き續き學生集會所に於て、姉崎博士の歓迎を兼ね京都哲學會秋季大會晩餐會が催された。因に兩氏講演の内容は追つて本誌に載せらるゝ筈であるから此處には略す。

### 心理學讀書會

新歸朝の野上助教授の歡迎、大槻講師の送別等を兼ね、十月七日午後四時より、心理學實驗場内演習室に於て例會開催、野上助教授の『歐米心理學實驗場視察談』あり。續いて大學本部樓上に晩餐會を開き九時談笑裡に散會した。

## 新著紹介

### 宗教と人生

帆足理一郎著

本書は著者が年を累ねて『新人』誌上に寄せた宗教論や社會批評を輯めて一卷と爲したもので、其流暢な筆に現はれた意見や感想

は、如何にも教養ある近代的基督教徒の誠見と抱負とを示して居る。其根本信条たるべき神を主觀的理想其物として見る内在的沈神論が、果して何處まで著者を基督教徒として保ち得るかは疑問であるが、唯基督教の一般的精神を立點として、進んで近代的思潮と現實的生活の中に奮闘せんとする人に取つては、かゝる觀念上の問題の如きはさまで重大なを意義を有しないかも知れない。現に著者は舊宗教の功利的他力主義を排し、奇蹟的救済を本とする基督教信仰を攻撃して、名目上のクリスチアンたらんよりは敬虔なる無宗教者たれと主張して居る。然も著者は決して素人としての基督教信者ではないので、其神觀や基督論の發展を叙し天啓や神學の權威を批評した所に、其歴史上教義上の専門的造詣の淺からぬことが現はれ、特に基督教若くは一般に宗教をば單なる哲學や人生觀と考へたり、又之を唯の道徳や社會的事業と同一視する謬見を排斥して、宗教を以て愛による見神の經驗、即ち宇宙との人格的靈交に在りと主張する所に、其宗教に對する徹底した洞察と理解とが示されて居る。唯著者の所謂宗教的態度である奮闘的生活と宇宙の神聖化即ち普遍の愛とが思想上如何に調和せらるべきか、又其向上の模範たる人としての基督の歴史的確實が、救済者としての神治の基督を否定した後に果して何の點まで保持し得られるか、又因はれたる忠君愛國や神社崇拜を痛快に排斥した其世界主義が、現在一般の民族主義と如何なる關係に立つべきか此等の問題は研究思索よりも實修實踐を主とする著者には余り多く考量に値しないかも知れないが、然し少くとも實行の前提として尙大いに反省すべき疑問たるを免れないであらう。然し固より

本書は宗教の理論的組織でもなければ、社會問題人生問題の學問的研究でもなく、唯著者の精練された基督的精神から見た人生の批評であり、又其信仰の告白であつて、蓋し眞面目な修養の資料として新しい内容のあるものと云はなければならぬ。麴町區平河町五、洛陽堂發行。定價金一圓三十錢。(宇野圓空)

### 忠義の哲學

ジョサイア・ロイス原著  
鈴木半三郎譯

「忠義の哲學」は個人主義の最も盛なる米國民の間に、身を捧げて公に奉ずる忠義の眞精神を扶植せんが爲めに原著者によつて、ハーバード、ボストン、エール等に於いて數次講演せられたるもので、その要綱を一九〇八年に上梓せられたのが原著である。

ロイスは同じハーバード大學にゼームスと共に職を奉じ相互に研鑽辨論せしがゼームス氏先づ物故して、後數年亞米利加哲學協會より六十歳の祝賀會を受けて氏又その後を追ふた。譯者は序によれば彼の地に在つて著者に親しく接せられた方で、ゼームスのみ我國に喧傳せられて論戰の當の相手たるロイスが餘り紹介せられてゐないのを嘆き、又本書は我國民族の根本精神と直接の交渉があるを以つて、氏の滿六十歳の記念祝賀哲學大會のあつたことを機會として譯出せられたのであつて、譯者なり發行期なりに當を得たものと言へる。

「譯文はいたく未成品」と初めに辭つては居られるが、今少し丁寧に譯して貰ひたかつた。硬い逐語譯も善くないが、「譯」である以上には餘りに碎け過ぎて、「譯」と言ふよりは忠實なる梗概と言